

蟹淵の主・隠岐郡隠岐の島町上元屋 令和2年9月23日

収録・解説・酒井 董美<sup>たむら</sup> イラスト・福本 隆男語り手 茶山儀一さん（明治30年生まれ）  
収録・昭和57年7月30日

## あらすじ

元屋の安長の谷の奥に蟹淵という名前の淵がある。昔、元屋の木樵りが木を伐っていたら、斧を取りはずし、斧が淵の中へ落ちた。にわかには滝の面が沸き上がって、蟹の爪が浮いてきた。すると姫さんが下から現れて、落とした斧を持っていく。「わらわはこの淵の主である。そこに大きな蟹がおつて、わたくしを痛めて手に合わない。今そなたの落とした斧がその爪の根に当たって、爪が取れて、その蟹が痛さに跳ね回ったので、その泡が立つたでしょう。あなたに頼みがあった、われは現れた。」

が、まともや一面に泡になって淵が大暴れになった。そうしてまた姫が水の底から現れてきた。やはり前のようにまた木樵りの斧を持ってきて、「木樵りよ、おまえの手柄によつて、わたしは急にこの蟹の苦勞から、一応逃れることが出来、おおきに助かった。その恩徳によつて、おまえはこれから長生きをする。それから身上がよくなることは保険します。それからこの安長の谷は水量が豊かであつて、いかなる日照りでもここに水の切れることはない。わたしはこの村の長者の娘であつたけど、故あつてこの淵に身を沈めて主になつていくが、元屋の人の雨がなくて日照りが続いたときには、ここに来て祈願をするように。必ずやご利益が現れます。間違ひありません。そう言うて姫は消えてしまった。見れば蟹の爪が二つも浮いている。その後、たいそうな大豪水にり、蟹の大きな二メートルも差し渡しのある甲羅のある蟹の死体が流れていた。それから後は、蟹の妨害することもなくなった。だれ言うとなしに、そこは

蟹淵と名がついたそうなの。その木樵りも金持ちになつたという話です。今でもわたくしが小さいときも、雨ごいにはそこへ行っていました。まあ今に、とんと昔ね。

## 解説

現地で収録したもので、かしましい蝉の声も一緒に入っている。ちょうど島根県教委の民俗調査の仕事で茶山さんからうかがつていたおり、屋の休憩時間にこの話をどこ存じかどうかお尋ねしたところ、即座に話してくださいましたものである。この話は昭和11年発行の横地満治・浅田芳朗編『隠岐島の昔話と方言』(郷土文化社報告第貳輯)に出ているのが初出だと思われる。幻想的な内容がみごとに茶山さんの語りでも嬉しく思ったものである。なお、原話は平成2年(1990)には民放の「まんが日本昔ばなし」としてもテレビ放映されている。  
(元島根大学法文学部教授)



[https://kanbenosato.com/minwa/kancho\\_200702.html](https://kanbenosato.com/minwa/kancho_200702.html)